

群読の指導と評価

群読のもつ力

読解には、必ず何か新しい発見があります。群読によって、教室は生き生きとよみがえり、子どもたちの表現力も見違えるほど豊かになっていきます。群読には、子どもたちと教室を活性化させる力があります。

国語の授業を担当する者として、もし、群読を体験したことがないとしたら、本などで様々な知識を得るだけで満足することなく、4、5人が集まって実際に声を出してみるとよいでしょう。自分の耳と体で群読の手応えを感じたとき、おそらくその魅力に気づくはずです。

なぜなら、声を合わせ、群読の一員となったとき、一人では感じることはできない読みの迫力に度肝を抜かれ、人間の声のすばらしさを感じ取ることができるからです。グループで読みの工夫をすればするほど、作品のもつよさ、言葉の重み、リズムの快さに魅せられることでしょう。

群読の指導と評価

何を群読の教材とするか、ここにすでに一つのポイントがあります。群読の効果は、あるところはソロで、あるところは群で、その力強さが声の響きに表れるからです。美しさと力強さを追究するにふさわしい教材を選んでいくこと自体が、すでに群読の指導となります。教師と子どもとの協働作業によって教材の選定がなされるとき、その学級の特色の表れた群読が生まれていきます。

その作品をどこで区切るか、誰がどこを読むのかという読み分かちと読み担いが大切な指導の要素となります。

《読み分かち》

読み分かちの作業をすることが、作品の理解に結びつきます。読解の授業などと言わなくても子どもたち一人一人が個人の力に依拠して、どこで読み分けられるのか、文脈に沿って作品の展開に即して内容を吟味し、イメージ化しながら考えていきます。

したがって、読み分かちの原案づくりは、個の読みを深め、言葉の力を培うものであると言えます。読み分かちは、場面転換したとき、登場人物が交替したとき、作者の視点・語り手の位相が変化したときにできます。また、表現の面では、盛り上がりや強調のある部分、対句的表現・並立表現がある場合にできます。

《読み担い》

誰が読むかを決めることは、群読グループの一人一人の個性を生かしていくことになります。最初は、機械的に割り振りをしても、実際に声を出すことで、その役割をどんどん変更していく柔軟性が必要です。

読み担いをすることで、かなり緊張する子どもが出ます。しかし、ここで群読の楽しさや工夫の面白さ、新しい感覚で作品を創り上げていく喜びを実感させるために、ぜひともプラス面の評価を行いたいものです。

どのように読み担うとよいかについては、試行錯誤しながら行うのもよいのですが、あらかじめ、次の2点については指導しておいた方がよいでしょう。

- ① 読み手の数は何人にするとよいか。一人か、二人か、三人か、グループ全員か。その表現効果を考える。
- ② 男声がよいか、女声がよいか、混声がよいか、声の質を考える。

いずれも作品の内容を考え、分担を決めていきます。一人で勝手に決めることができない分読作業は、子どもたちの話し合いを余儀なくさせるものであり、対話の苦手な子どもにとって、自然にグループで話をしていくチャンスともなります。

出来上がった群読プランをもとに、いよいよ発表となります。発表を次の学習に生かすためにも、ぜひ相互評価をさせたいところです。他のグループの読みのどこがよかったのか。どこが自分たちと違った工夫をしているのか。よい点を発見するという目と耳を駆使させるようにします。個々の読みが全体として調和し、響き合いが生まれているかを中心に聞かせたいものです。